

白居易と韓愈の聯句詩について

——聯句形成史におけるその位置をめぐって——

埋 田 重 夫

〔一〕

一般的に詩歌が、詩人の感動とそれを客體化しようとするエネルギーによって生み出されるとするならば、この“客體化”は中國古典詩の場合、“離別”“遊覽”“行旅”“邊塞”“宴樂”などに代表されるさまざまな“場”(環境)のもとでなされてきたと言えよう。文學作品を生み出すそうした“場”の存在と、中唐詩の顯著な特色の一つをなす集團文學の發生という事實をあわせ考へる時、必然的に文學における“個人”と“集團”という問題に遭遇せざるをえない。一般に和韻詩(依韻・用韻・次韻)や聯句詩⁽¹⁾は、様式的にも個人が對者の直接的な影響を受け、しかもそのことを多分に意識して作られる性格が強いが、特に後者は、複数の詩人によって時間的・

空間的・心理的に同じ條件(場)を共有して制作されるため、前者以上に、詩歌實作における“自己”と“他者”という問題を含んだ興味深い様式となっている。

集團文學としての聯句詩が中唐に入って急激に多作されたとの指摘は、誰もが首肯することであるが、ではそうした中唐詩的特質を濃厚に有する詩歌の一形態が、なぜ韓愈・白居易らによって集中的に試行されたのか、また、兩者の間にはどのような表現上の差異が認められるのかという問題や、中唐聯句詩が中國中世文學の聯句形成史の上で、いかなる段階(位置)にあるのかという問題に關しては、從來あまり系統的には觸れられてこなかったように思われる。本稿では、漢魏六朝聯句を概観した後、中唐聯句詩に焦點を絞って論を展開し、最終的には、白居易とその文學集團にとつて聯句詩が

どのような意味(意義)を持つものであったのかという問題について、幾つかの見解を提出してみたい。白居易の作品を様式論的な側面から考察する際、その聯句詩はやはりどうしてもとりあげねばならない領域であると判断されるからである。

〔二〕

實作品としての聯句を検討する前に、この様式に對する先行諸説の指摘とその論點について確認しておきたい。

數種の論文は別として、現在までに國內で出版された諸書の聯句への説明は、①柏梁體詩・聯句詩への概説、②七言詩の起源説明として漢武帝の柏梁體詩に一部言及するもの、③部分的に中唐聯句詩に言及するもの、といった三つのケースに分類できるが、いずれも六朝より唐代までの聯句を通時的に述べたものではなく、その内容もごく狭い範圍のものになっている。他方、中國歴代の知識人が聯句をどのように認識していたかを、主に宋元明清代の詩話類を使用してみると、その言及例は相當數にのぼる。その大部分が詩話という性格上、斷片的な記述、印象批評的な評言に終始してはいるものの、評價史という意味で、そこに表われた中國の傳統的

な見解をさぐっておくことは、實作品を考える際にどうしても不可欠な作業であろう。

柏梁體詩を含めたいわゆる廣義の聯句への關心は、六朝期を代表する文學理論書である劉勰『文心雕龍』(明詩編・時序編)や鍾嶸『詩品』(卷一)を始めとして、その他復數の書に既にその記事が散見されることより、歴史的にみても、決して小さなものではなかったと推測される。しかし數量的にも内容的にも、聯句についてまとまった記述がなされるのは、宋代以後の詩論書・詩話・隨筆においてである。詩話類の膨大な總數に對して正確なデータを求めることは事實上無理であるが、確認できた先行文獻各種の發言内容を分析してみると、以下のような⁵⁾になる。

〔1〕主として柏梁體詩一般に言及するもの

- 唐代、吳兢『樂府古題要解』卷下、○明代、費經虞『雅倫』
- 清代、王士禛『池北偶談』卷十三、顧炎武『日知錄』卷二十二、馮舒『詩紀匡謬』、汪師韓『詩學纂聞』、趙翼『陔餘叢考』
- 卷二十三、葉燮『原詩』卷四)

〔2〕主として聯句詩一般に言及するもの

- 宋代、江少虞『皇朝類苑』卷三十七、○明代、徐師曾『文體明辨』聯句詩序、吳訥『文章辨體』聯句詩序、張鼎思『瑯琊

代醉編』卷三十五、胡震亨『唐音癸籤』卷三、王三聘『古今事物考』卷二、○清代、王士禛『池北偶談』卷十四、趙翼『陔餘叢考』卷二十三、錢木菴『唐音審體』、李重華『貞一齋詩說』、錢大昕『十駕齋養新錄』卷十六、魏崧『喜是紀始』卷九)

[3]主として特定の詩人、もしくは集團の聯句詩作品に言及するもの

(評言の數量が非常に多いので省略する。)

これら三種のうち、[1][2]は柏梁體詩や、聯句詩の句法・押韻・題材・史的變遷などを簡單に記述する場合がほとんどであるのに對して、[3]は、複數の詩人とその聯句詩創作にまつわるエピソード(宴席に象徴される創作の「場」における事件)——多くは他者に抜きん出た個人の詩才をとり上げる——を紹介したり、ある集團によって作られた聯句詩に價值判斷を付與することが多い。中唐聯句詩への考察で特に注意されてよいのは、主に[3]である。

[3]群に含まれる詩話類の記事を内容面から考えてみると、その大勢は、①韓愈・孟郊に代表される集團による聯句詩、②唐玄宗らの聯句詩、③白居易らの聯句詩、の三種に分けるのが最も自然のようである。このうち言及數が壓倒的に多いのは①韓孟聯句詩で、その總數は斷片的なものまで含めると

四十近くにも達する。他の二者②③への言及が[3]全體において僅か數例であることから判斷すれば、今回参照しなかったその他多數の詩話の存在を考慮しても、こうした記述傾向は助長されこそすれ、減少することはないであろう。「聯句詩」を論評する場合、まず韓愈を中心とする文學集團が想起され、そしてその聯句詩がとりあげられるということは、聯句詩の形成とその展開を考えるうえで、韓愈の文學集團への考察が不可缺であることを表わしている。

韓孟聯句詩への評は實にさまざまな觀點から述べられており、少數の例外を除いて、評者の見解は、明確に、正負兩方向に二分されている。

(傍點埋田以下同じ)

- ① 山谷云、會合聯句、孟郊、張徹與焉、四君子皆佳士、故意氣相入、雜然成文。世之文章之士少聯句、嘗病筆力不能相追、或成四公子甚耳。(『茗溪漁隱叢話』前集卷十八、韓吏部下)
- ② 退之征蜀聯句云、「始去杏飛蜂、及歸柳嘶蜚」、語新意妙。(『詩人玉屑』卷六)
- ③ 東野與退之聯句詩、宏壯博辯、若不出一手。(『中山詩話』)
- ④ 聯句之盛、退之・東野・李正封也。城南聯句云、「紅

皺晒簷瓦、黃團掛門衡」。是說乾棗與瓜萁、讀之猶想見西北村落間氣象。征蜀聯句云、「刑神託蒼旄、陰焰颯犀札。盡雕刻之功、而語仍壯。李正封善押韻、如從軍聯句、「押水沙囊涸」、皆不可及。〔彦周詩話〕

⑤ 聯句詩、唐惟顏真卿、韓退之爲多。顏雜詠諧、韓與孟郊爲敵手、各極才思、語多奇崛、尤可喜。〔唐晉癸籤〕卷十、胡震亨說

⑥ 退之石鼎聯句詩、有道士軒轅彌明、其語往往高古出羣。

〔焦氏筆乘續集〕卷五・石鼎聯句の條

⑦ 韓・孟聯句、字字生造、爲古來所未有、學者不可不窮其變。〔峴傭說詩〕

韓愈・孟郊らの個別的的作品を評價するもの(①②④⑥)、その聯句詩全般を評價するもの(③⑤⑦)といった差はあるものの、これらの評は皆等しく肯定的價值觀をもつて述べられている。また傍點部分から、韓孟聯句詩のいかなる表現要素が高く評價されたのかについても知ることができる。ここで注視に値するのは、高い押韻技術が聯句詩制作に要求される重要な条件の一つであるとの示唆(④)と、①⑤の「四君子皆佳士、故意氣相入、雜然成文」「韓與孟郊爲敵手、各極才

白居易と韓愈の聯句詩について(埋田)

思」の評文である。押韻面での技法が大切だとの示唆は、「聯句」が文字通り、句の展開・長篇化に多大な注意を払う詩的様式であることを想起すれば、容易に理解できよう。また聯句詩は、純粹な個人的營爲の所産である一般の詩歌とは違って、同一次元上で、自己(個なる單位)と對者(集なる單位)の詩才が、拮抗し啓發し合うある種の力學的緊張關係・過程を経て一つの作品へと結晶するものだけに、様式的にも独自の表現機能を潜在させていると言える。この意味で、傍點部の各語は、聯句詩の聯句詩たる獨自性を暗示している。

⑧ 韓・孟聯句體、可偶一爲之、連篇累牘、有傷詩品。〔說詩碎語〕卷上七

韓孟聯句詩にやや負的な評價を加えるものの代表として、⑧に示した沈德潛評がまず指摘できるが、全體的にみると、こうした記述傾向は極端に微弱と言える。しかしここでより注目されることは、プラスにしろマイナスにしろ、聯句詩が批評の對象とされる際、必ず韓孟聯句詩が引用される事實であらう。こうした現象は、韓愈・孟郊らによって、聯句詩が

試行され開發されたという文學史上の事實を意味すると同時に、多數の歴代知識人（批評家）たちが、韓愈らの生存した中唐期を聯句形成史の大きな轉折點と認識していたとの事實をも暗示する結果となっている。

以上、述べてきた韓愈らへの評言と平行して留意されるのは、白居易らの聯句詩への言及である。確認できた『古今詩話』『唐言彙籤』『帶經堂詩話』（卷十八・辨析類）『甌北詩話』の四書に敘述される記事のうち、注目したいのは以下の二例である。

- ① 裴居守洛都、築園、名堂綠野、時出家樂、與白居易・劉禹錫・李紳・張籍・崔羣諸詩人游譙聯句、纏錦旣奢、箋霞尤麗、所云、「昔日蘭亭無豔質、此時金谷有高人」者、至今可追想其盛。（『唐言彙籤』卷二十七）
- ② 又如聯句一種、韓・孟多用古體、惟香山與裴度・李絳・李紳・楊嗣復・劉禹錫・王起・張籍、皆用五言排律。此亦創體。（『甌北詩話』卷四・白香山詩の條）

清の趙翼が、中唐を代表する兩派の聯句詩の差異を、様式論的な視點に據つて、古體詩と五言排律詩の對立關係で捉え

ていることは、相對的に『甌北詩話』以外の詩論書にこうした見解を發見し得ないことより、一層重要な批評内容となっている。中唐聯句詩の個別的特色を明示した一つの評言として注意されよう。

以上のように多數の詩話類を参照しても、聯句詩のもつ表現機能性を、客觀的な視點にたつて敘述したものはほとんど見出せない。つまり聯句という詩の様式に關する系統的・體系的な性格論が脱落している。これは歌行詩・樂府詩などの古體詩や、絶句・律詩・排律などの近體詩への言及がさまざまになかたちで展開されていることと比較すると、極めて對照的であるとさえ言えよう。しかし記述内容の分類あるいは各論點の整理によつて、中國歴代の讀書人たちが、韓白に代表される中唐詩人たちと聯句詩との強い結びつきを、いわば文學の常識として理解していたことが確認されたと思う。次にこうした從來の説をも参考にしながら、具體的な作品の検討に入りたい。

〔三〕

漢初より六朝末までに制作された聯句詩・柏梁體詩で、今日まで傳承される作品数は全部で四十四首である。その内譯

が、漢(一)・晉(三)・宋(五)・齊(七)・梁(二十四)・北魏(二)・北周(二)であることから、こうした詩の様式が本格的に愛好され多作されたのが、ほぼ宋齊梁三代であることが理解される。つまり文學作品としての鑑賞に耐えるほどの量的蓄積は、安定した貴族社會を背景にして修辭文學が抬頭した六朝後期——特に梁代——まで待たねばならなかったと言えるわけである。一個人としての多作が目立つ詩人は、梁の何遜(十七)を筆頭に、齊の謝朓(七)・宋の鮑照(三)・梁の元帝(三)・梁の武帝(二)・北周の庾信(二)の六人が指摘できるが、これは、王侯貴族の邸宅やサロンが存在が聯句詩の育成を促したことをしのばせている。そして更に齊代の聯句がほとんど謝朓一人によって作られていることや、梁の何遜が個人として十七首もの多作を誇っていることは、相對的に煩雜な様式をもつ聯句が、典故多用・四聲利用などを愛した當時の貴族趣味に合致するものであったことをも證明している。

こうした全體の詩作數・詩人數を把握したうえで、唐以前の聯句の音數律(字數 \parallel 音節數)面での特徴を再度確かめておきたい。

白居易と韓愈の聯句詩について(埋田)

項目		時代	
雜言體	七言體	五言體	漢
0	1	0	魏
0	0	0	晉
0	1	2	宋
1	1	3	齊
0	0	7	梁
0	2	22	陳
0	0	0	北魏
0	1	1	北齊
0	0	0	北周
0	0	2	隋
0	0	0	總計
1	6	37	

唐以前の聯句は、音數律的にみた場合、鮑照「與謝尚書莊三連句」を唯一の例外として五言體と七言體に明確に分離するが、その詩數比率が約六對一であることから、五言聯句詩が主流となつていると言える。これは六朝詩の主要な詩型が五言詩であつたことに符合しているが、ここで重要なことは、そうした音數律の差異が様式的にほとんどそのまま聯句詩と柏梁體詩の違ひとなつて表われていることである。この時期、七言體で隔句韻、しかも詩内容が句間相互で一貫性・脈絡性のある、いわゆる聯句詩を作ろうという姿勢は弱いものであつたと推測される。中唐以後になつて初めてこうした作例が數首認められることから、(七言體——柏梁體詩・(五言體——聯句詩)という對立觀念が六朝では相對的に固定していたと考えられよう。以下、それら七言柏梁體の詩題のみ舉

げる。

○漢、武帝「柏梁詩」〔《藝文類聚》卷五十六〕

○晉、謝道韞「詠雪聯句」〔《世說新語》卷上、言語編・《晉書》卷九十六〕

○宋、孝武帝「華林都亭曲水聯句效柏梁體」〔《藝文類聚》卷五十六〕

○梁、武帝「清暑殿聯句柏梁體」〔《藝文類聚》卷五十六〕

○梁、元帝「宴清言殿作柏梁體」〔《藝文類聚》卷五十六〕

○北魏、孝文帝「縣瓠方丈竹堂侍臣聯句」〔《北史》卷三十

五〕
詩題からもわかるように、これらの諸詩は、皇帝主催の宴席で官僚によって作られたものが大部分で、帝及びその治世への賞讃と臣下として朝廷に列る機會をもてたことに對する喜び、感謝の辭が主な内容となっている。七言柏梁體詩のこうした君臣間の公的な場における創作という特質は、これ以後唐代にまで、屈折し變化することもなく繼承されていくが、決して多作されるものではなかった。様式・内容ともに儀禮的色彩が濃厚で、詩人個人の詩的感興が率直に表白され

にくい柏梁體詩に對して、この對極に位置すると考えられる五言聯句詩は、題材・詩想レベルでの制約が緩く、聯句と呼稱される文學作品の主流を形成していく。傳統の有無が介在していることは明らかである。

隔句韻で各句ごとに一貫性・連續性が認められるいわゆる六朝五言聯句詩は全部で三十七首であるが、その句法をみてみると、大多數が各人四句ずつ詠うもので、この詠法から逸脱するものはわずか三首に過ぎない。晉、賈充「與妻李夫人聯句」〔《玉臺新詠箋註》卷十〕と北魏、節閔帝「聯句詩」〔《北史》卷三十六〕は一人二句ずつ詠じたものであるし、北周、庾信「冬狩行四韻連句應詔」〔《庾子山集》卷五〕は八句が一區切りとなっている。現存する作品群のなかで、賈充の作品が、夫婦間の愛情を題材とし、二句交替の最も早い五言聯句詩となっていることは注目しておきたい。五言二句交替という詠法が唐代においては最も一般的な型（スタイル）になるからである。

賈充と同時代の著名な詩人として陶淵明がいるが、彼は「聯句」とのみ題される作品を一首残している。淵明・愔之・循之の三人が四句ずつ詠ったものであるが、これが六朝の主流となる五言四句交替の聯句詩の最も早い作例となっていることから、陶淵明はいわば六朝聯句詩の原點に位置してい

ると言えよう。「靖節先生集」卷四所收のこの作品は、偶數句を入聲字で押韻し、十六句から構成されている。句間相互の論理は非常に明瞭で、三人が四句ずつ分擔して作りながら、全體的には一個人の作品とも言える内容になっている。つまり賈充の詩にみられた二者（對者）間における贈答的な要素は消失し、十六句全てが完全に一人の詩人によって詠われたかのような内容になっているのである。そしてこの詩が多分に哲學的・説理的な題材によって貫かれていることや、内容面で、個としての「獨自性」が弱まり、一首それ自體の

「全體性」・「協調性」を保持していることは、陶淵明が、様式・題材兩面において六朝聯句詩の出發點にあるとの想定を客觀的に保證することになるだろう。一般に、陶淵明の詩風が六朝文壇の創作傾向から乖離した獨特のものであると評されていることを考えると、特に興味深い。

陶淵明の出現によって、様式的にはほぼその方向を決定づけられた五言聯句詩は、その後、宋・齊代に至ると、鮑照・謝朓らによって詩中に對偶的な表現が盛り込まれるようになる。題材も、従來の柏梁體詩にみられた、宴席での情景描寫や君臣間の公的儀禮といった要素を温存しつつ、しかも新たに、時間推移への強い關心——例えば無限の自然と有限なる人間

白居易と韓愈の聯句詩について（埋田）

存在への慨嘆など——に支えられた抒情的傾向を併せもつようになる。そして六朝末、更に初唐・盛唐末までには、四句交替の五言聯句詩の題材は「望郷」「離別」「閨怨」などに、實にさまざまな領域にまで擴充されるようになり、中唐以後、聯句詩が新しい展開を示すための下地がほぼ用意されたとも言つてよい。こうした聯句詩における題材の擴充・發展は、盛唐までの唐代詩人と言うよりはむしろ鮑照・謝朓・何遜らの六朝後期の詩人によって飛躍的になされたと言わねばならないだろう。なぜならば中唐以前の聯句詩は、『全唐詩』を檢索しても①肅宗皇帝「賜梨李泌與諸王聯句」〔『全唐詩』卷四〕②李白「改九子山爲九華山聯句」〔同、卷七百八十八〕③杜甫「夏夜李尚書筵送宇文石首赴縣聯句」〔同、卷七百八十八〕の三首に過ぎないからである。まさに六朝時代は聯句の習作期・形成期と考えられよう。

〔四〕

中國中世韻文史にあって、六朝末から盛唐期までに複數の詩人集團によって試行錯誤的に作られてきた聯句は、中唐期を通過することで、實に多様な表現様式をもつようになる。『全唐詩』（卷一・二・四・七百八十八〜八百一）に收載される

柏梁體詩・聯句詩は全部で百八十三首にもなるが、その大部分は中唐・晩唐兩期の約一四〇年間に制作されたものと比較してみれば、數量的に三倍もの作品群が残されたことになり、聯句という様式が唐代後半期の詩人たちの創作意欲をかなりかきたてたことを示唆している。唐代聯句の著しい特色は、創作詩數の増加という點以上に、その内容面での多彩さにあると判斷される。つまり六朝以來の傳統である毎句押韻・毎句交替の七言柏梁體詩、隔句韻・四句交替の五言聯句詩という二大形態は基本的には保持されながらも、従来みられなかつた新しい句法構成に基づいた聯句が多數出現してくるのである。以下そうした作品の系統分類を試みることで、中唐・晩唐の聯句をめぐる幾つかの問題を考えてみたい。句法面から整理すると次のようになる。(一韻到底のものを○、換韻するものを◎と表示する。)

[1] 全體が七言體によって構成されている作品群(27首)——
全て一韻到底

① 一句交替のもの(16首)——○純粹な柏梁體詩(5首)⁽¹⁸⁾
○句間相互が論理的に連續しているいわゆる變形柏梁

體詩(11首)⁽¹⁹⁾

② 二句交替のもの(7首)

③ 四句交替のもの(4首)

[2] 全體が六言體によって構成されている作品群(2首)——
全て一韻到底

① 二句交替のもの(1首)

② 四句交替のもの(1首)

[3] 全體が五言體によって構成されている作品群(102首)

① 一句交替のもの(1首)——一韻到底

② 二句交替のもの(52首)〔○51首、換1首〕⁽²⁰⁾

③ 四句交替のもの(34首)〔○31首、換3首〕

④ 變則交替のもの(15首)——全て一韻到底

[4] 全體が四言體で構成されている作品群(5首)

① 二句交替のもの(2首)〔○1首、換1首〕

② 四句交替のもの(3首)〔○1首、換2首〕

[5] 全體が三言體で構成されている作品群(4首)

① 四句交替のもの(2首)〔○1首、換1首〕

② 六句交替のもの(2首)〔換2首〕

[6] 全體が雜言體で構成されている作品群(3首)

① 一言から九言までで構成され二・三・四句交替の一韻

到底の作品（1首）

②一言から七言までで構成され四・八・二句交替の一韻到底の作品（1首）

③三言から五言までで構成され四句交替の換韻の作品（1首）

唐代聯句では七言・六言・五言・四言・三言・雜言と音數律面だけでも多様な句法が意識的に試行されており、まして押韻（音位律）のやり方や何句ごとに詩人が交替するののかという細部の問題に至っては、六朝聯句とは比較にならないほど複雑多様な様相を呈している。[1]①で述べた變形柏梁體詩の出現はその一例と言えよう。

初唐・盛唐期、ほとんど創作されなかつた聯句は、中唐以後の詩人によって急激に多作され、多種多様な句法が試行された。その理由はいろいろあるが、まず指摘しなければならぬことは、聯句を作り出す階層が貴族から中小地主階級出身の官僚へと質的に變化している點であろう。中唐聯句（詩）の流行を考える時、安史の亂による貴族の没落と、科擧制度によって登用された新興士大夫階級の勃興という社會的變動を無視することはできない。六朝後期、専ら貴族のサ

白居易と韓愈の聯句詩について（埋田）

ロンにおいて、遊戯の一つとして育まれた聯句を、新しい社會體制を主導する新しい階層の士大夫たちが、相互の連帶と友情を再確認するための一手段として、再び積極的に活用したのではないかと思われる。つまり中唐聯句詩の創作には、新興士大夫階級の“自己存在”への問いかけが強く介在していたと考えられよう。この意味で、中唐以後、古文復興運動・新樂府運動が韓愈・白居易らによって提唱され、また多數の諷諭詩・傳奇小説が連續的に出現してくるのも理由のないことではない。

このように唐代の詩人たちによって、この詩がもつ各種の可能性が探究され開發された。そしてこの聯句様式としての可能性は、六朝聯句の主流を形成していた五言四句交替の句式を基本にしながら、そこにどれだけ多様なヴァリエーションを新たに付加できるのかという點において、最も集中的に志向されていたと考えられよう。なぜならば、前表[3]②③に示した八十六首の聯句詩は、量的にも唐代聯句の主流を形成するものであるが、そうした作品こそが陶淵明以來、六朝の各詩人サークルによって作られてきた傳統的な句法だからである。更に句ごとの交替にしても、二句・四句交替が依然として唐代聯句の最も一般的な型であり續けたという事實は、

節奏リズムの根源という問題を含みながらも、聯句の様式が六朝からそのまま直接的に繼承されたことを示している。これは廣く中國文明における先例や典型の重視とも關係している。もちろん唐代になって新しいスタイルの聯句が複數的に出現してくることも事實であるが、それ以上に重要なことは、そうした特殊な句法構成をもった聯句詩が、ある特定の詩人集團によつてのみ制作されたものであつて、新形式の聯句詩を唐代詩史において數量的にほとんど定着させることができなかった點であろう。結論的に言うならば、唐代聯句は六朝聯句を原型にした新たなヴァリエーションの模索と實踐の段階にあつた、と解釋するのが最も自然であると思われる。

唐代聯句のうち句數の最長なるものとしては、七言では二十句の顏真卿「七言重聯句」(『全唐詩』卷七百八十八)が擧げられ、また五言では三百六句の韓愈「城南聯句」(同、卷七百九十二)が指摘できるが、こうした長篇化は白居易・韓愈らの聯句詩に特に顯著な特徴であつて、他の詩人のそれは多くて三十句、最も標準的なもので二十句以下という状態にある。²²⁾唐代の聯句を構成する著名な詩人集團としては清晝(三十三首)・顏真卿(二十二首)・段成式(十九首)・白居易(十四首)・韓愈(十四首)・皮日休(八首)・李益(七首)の七グル

ープをまず確認しておかねばならない。五首以上の多作詩人に、一人も初唐・盛唐詩人が含まれないことは、聯句という様式が中唐以後、集中的に愛好され創作されたことの證左ともなろう。これら七集團によつて積極的に作られた聯句は「避暑納涼」「送別」「贈答」「聞怨」「遊覽」「看花・酒宴・登高など」といった題材を中心にしつつ、かつ、詩中に「花」「月」「酒」「虫」「雲」「星」「柳絲」「池」「落泉」「齋戒」などの個別的素材をとり入れることで、重層的な作品世界を構築している。そしてそれらの作品を生み出す環境がほとんど例外なく夜會・夜宴・水堂・水亭・池亭・溪館・船中・南樓・寺院・禪院・僧房・山宅・公院などの、集會としての場であることも注意されよう。つまり聯句という様式と題材との關係がかなり固定的とも言えるわけである。前述七集團の聯句について今一つ注意されねばならないのは、白居易・韓愈・李益らの集團による作品が様式的に終始ほぼ安定して五言體で作られているのに對し、他の四者のそれは、制作された場・時の違ひによつて句式の變動が認められるという點である。こうした現象は前者のサークルに屬する詩人が相對的に限定されていて、多くても十人前後であることと決して無關係ではないであろう。創作の場において、毎回ほぼ決まった参加者に

よって、決まった詩的様式を用いて詠うという姿勢は、顔眞卿・清晝らの聯句詩に示される對極的なそれと比較して、詩人相互の連帯感や時空レベルでの共有感覚は、より緊密で大きなものであると推測される。この意味で白居易・韓愈・李益の聯句詩はいわば「座の文學」の本質により的確に觸れており、他のケースとは少し異なったものとして注目したいと思ふ。

〔五〕

前節で述べた唐代聯句の一般的創作傾向を前提として、以下、白居易の聯句詩に焦點を絞って考えてみたい。白居易の聯句詩は、韓愈と比較することにより一層明確に理解される。

第一に指摘すべきは様式の違いである。兩者ともに十四首で、その基調が五言詩であることは共通するが、詩型・句數の長短・句法は全く相反している。既に述べた〔近體(排律)⇕古體〕・〔長篇性⇕中篇性〕という對立に平行して兩者が決定的に異なる點は、句交替であろう。つまり白居易らの場合が、六朝・唐代の最も通行性の高い句法である二句交替(五首)、四句交替(九首)から逸脱することがないのに對し

て、韓愈らの聯句詩はその句の連ね方が極めて不規則なのである。第四節に表示した系統分類のうち、〔3〕の④はほとんどが韓愈らによってなった作品群である。⁽²⁵⁾これは韓孟文學集團が、五言以外の音數律を聯句詩に援用することに消極的でありながらも、句交替という側面においては標準に固執せず、積極的に新境開拓を圖つたとも言えるだろう。例えば韓愈・孟郊・李翱が詠った「遠遊聯句」の句式交替は次のようなものである。

○孟郊(2句)↓韓愈(2句)↓孟郊(2句)↓
 李翱(2句)↓孟郊(10句)↓韓愈(10句)↓
 孟郊(8句)↓韓愈(8句)↓孟郊(16句)↓
 韓愈(18句)。

しかしこうした創作姿勢は、詩史という觀點に據って考えてみると、晩唐を代表する聯句詩多作集團(例えば杜牧・段成式・皮日休・陸龜蒙・清晝・潘述など)にほとんど影響を及ぼすことなく、ただ韓孟聯句詩を様式的に特色づける一スタイルとなったに過ぎなかった。⁽²⁶⁾聯句詩の律體化という問題はあるものの句交替に限定していえば、唐代の聯句詩の主流

は、明らかに、六朝からの傳統を遵守している白居易らのそれだと言わねばならない。

兩派の差異として第二に指摘すべき點は題材（詩内容）である。一般に聯句という様式のもつ著しい個性の一つは、各詩人にとつて、作品の創作と鑑賞とが同居し併存しているという事實であろう。そして何よりも同一の詩型・同一の韻字・同一の題材を集團的に、あるいは連動的に詠みつないでいくという行爲によつて、參加詩人たちは、他のケースでは必ずしも味わいがたい知的刺激や連帶意識を享受し確認しやすかつたと推測されよう。「個」から「群」へと收束されることへの共鳴感に支えられた「座の文學」の出現は、確かに中唐詩を考察する上で大きな問題を含んでいる。こうした特性を内在している「座の文學」を考えた場合、それを文學活動として成立させている要件は

- (1) 詩才練磨としての場（主として押韻・對句・詩想次元での競作的要素が強い）
- (2) 詩才の誇示、發表のための場（技巧の誇示による信用の獲得や確認など）
- (3) 餘興、機智を純粹に楽しむための場（戯笑性が強いいため、特異な詩型・題材を扱う場合が多い）

[4] 特定の集團に所屬する詩人相互の社交、友情確認のための場（友の赴任による送別を詠ったり、酒會での交誼をとり上げることが多い）

の四つに歸納できると思われる。もちろん[1]と[4]は互いに關連していて明瞭に區分できる性質のものではないが、白居易と韓愈の聯句詩を題材面から考えた時、こうした基準の設定はかなり有効であろう。というのも白居易らの聯句詩は、送別や宴席での交情を詠じたり、あるいは裴度の公宅で落景や薔薇を觀賞した際に作られたものが大部分で、前述の[4]の傾向が濃厚だからである。これに對して、相對的に讀者にその集團性を感じさせない作品は、「秋霖卽事聯句三十韻」「首夏猶清和聯句」などの數首に過ぎない。例えば以下示す二首は白居易らの聯句詩の作風を最もよく表わしている。

喜遇劉二十八偶書兩韻聯句

病來佳興少 老去舊遊稀

笑語縱橫作 杯觴絡繹飛

清談如金玉 逸韻貫珠璣

高位當金鉉 虛懷似布衣

已容狂取樂 仍任醉忘機

（劉禹錫）

捨眷將何適 留歡便是歸 (白居易)

鳳儀常欲附 蚊力自知微

願假尊疊末 鷹門自此依 (李紳)

花下醉中聯句

共醉風光地 花飛落酒杯 (絳送劉二十八)

殘春猶可賞 晚景莫相催 (禹錫送白侍郎)

酒幸年年有 花應歲歲開 (居易送兵部相公)

且當金韻擲 莫遣玉山頹 (絳送庾闈長)

高會彌堪惜 良時不易陪 (承宣送主客)

誰能拉花住 爭換得春回 (禹錫送吏部)

我輩尋常有 佳人早晚來 (嗣復送白侍郎)

寄言三相府 欲散且裴回 (居易、時戶部相公同會)

友情(友誼) 確認としての性格が強い白居易・劉禹錫の聯

句詩と比較して、韓孟の聯句詩は、[1]ないし[2]の性質が強いと判断される。つまり彼らの主要題材は、景物を餘すところなく描寫し盡くしたものの(「城南聯句」)や鬪雞・納涼・秋雨などの個別的な事象やそれに對する個人的な感慨を詠ったものがほとんどで、自己と集團との密着した關係を述べるとい

白居易と韓愈の聯句詩について(埋田)

う意圖は、相對的に弱いと言える。もちろん「同宿聯句」「雨中寄孟刑部幾道聯句」「遠遊聯句」「遣興聯句」の如きは交情を詠ったものであるが、それは集團としてよりはむしろ個々の友情(多くは韓愈と孟郊の友情)を詠うもので、白居易らの作品と少し異なっている。つまり韓愈らの場合、題材的に、集團でつくる聯句詩でなければならぬという必然性が強いのである。この點は、彼らの聯句詩が、大むね詠史・詠物・詠事的傾向が強く、長篇性を帯びていることや、措辭が奇險なこととも無關係ではないであろう。参考までに「同宿聯句」を引用する。

自從別君來 遠出遭巧譖 (韓愈)

斑斑落春淚 浩浩浮秋浸 (孟郊)

毛奇觀象犀 羽怪見鵬鳩 (韓愈)

朝行多危棧 夜臥饒驚枕 (孟郊)

生榮今分踰 死棄昔情任 (韓愈)

鵠行參綺陌 雞唱聞清禁 (孟郊)

……………(以下略す)……………

先に示した白居易らの聯句詩と違って、集團創作故の連帶

感はほとんど感じられない。兩派の聯句詩に大きな懸隔があることは否定できないと言えよう。

〔六〕

以上總合して考えると、白居易と韓愈は、ともに同数の聯句詩を残してはいるものの、その創作姿勢・様式・句法・題材・言辭は、いずれもかなり異質であると見なせよう。

“個”としての詩人が“他者”としての詩人に影響を與え、かつまたその影響を受けることによって自己の詩境の擴大を意圖するということが實際にあるとするならば、こうした現象は、明らかに白居易よりも韓愈に強く認められる。白居易は聯句詩において、競作練磨したのではなく、むしろよりよき友情の充足を求めたのだと考えられよう。彼にとつて聯句詩は、より純粹に交遊・社交の手段としての様式であつたと判断されるのである。聯句形成史の實態から言えば、白居易らの諸作品こそ、聯句様式の表現機能という意味で、その本質により適合したものであつたのかも知れない。聯句詩によつて志向するその方向が白居易と韓愈において著しく異なっているという事實は、聯句詩論・中唐詩論・韓白論のいずれにおいても、今後、十分に留意されるべき要點である。

と考えられる。

〔註〕

(1) 本稿では、柏梁體詩と聯句詩を含めた廣義の詩的様式を聯句と規定する。

(2) 管見の範圍であるが、中國の聯句詩については以下の論文が參考になる。(1)能勢朝次「聯句と連歌」(『能勢朝次著作集 第七卷・連歌研究』思文閣出版・一九八二年)。(2)漢・六朝・唐代の聯句を概観し、連歌との比較に及んでいる。(3)鈴木虎雄「柏梁臺の聯句」(『藝文』二一・一・明治四十四年)。(4)漢武帝になると傳えられる柏梁體詩の起源について論じている。

(3) 青木正兒「聯句淺説」(山口大學・「文學會誌」第一卷創刊號・一九五二年)。(4)唐代までの聯句の一般的傾向を簡單に説明している。(4)向島成美「六朝聯句詩考」(大修館書店・「漢文教室」第一四一號・一九八二年・四月)。(5)六朝聯句のみ詳しく考察している。

(3) ①『大漢和辭典』・『中國學藝大事典』(大修館書店)など、②青木正兒『支那文學概説』(弘文堂)・狩野直喜『支那文學史』(みすず書房)・内田泉之助『中國文學史』(明治書院)・『中國文化叢書・文學概論』(大修館書店)など、③兒嶋獻吉『支那文學雜考』(關書院)・目加田誠『唐代詩史』(目加田誠著作集第六卷・龍溪書舍)・松浦友久、田口暢穂編『中

國の名詩鑑賞6・中唐（明治書院）・原田憲雄『韓愈』（漢詩大系11・集英社）・清水茂『韓愈』（中國詩人選集11・岩波書店）など。

- (4) 本節立論のために使用した詩話集・隨筆類を記し、調査範圍を明示しておきたい。○宋、胡仔編『苕溪漁隱叢話』・宋、阮閱撰『詩話總龜』・宋、魏慶之撰『詩人玉屑』、○明、胡應麟撰『詩數』・明、胡震亨撰『唐音癸籤』、○清、吳景旭撰『歷代詩話』、○民國、丁福保編『清詩話』、○現代、郭紹虞編『宋詩話輯佚』、○京大東洋史研究会編『中國隨筆索引』、○佐伯富編『中國隨筆雜著索引』、○その他、個人的メモ。
- (5) 引用書名は、首尾一貫した論理で述べられているもののみ限定し、部分的な紹介記事は省略した。

(6) 例えば『苕溪漁隱叢話』前集卷三十八「東坡」の條、『詩話總龜』前集卷三・後集卷六、『全唐詩話』卷三「柳公權」の條、樂史撰『廣卓異記』卷三などが指摘できる。

(7) 「雪浪齋日記云、退之聯句、古無此法、自退之斬新開闢。余觀謝宣城集、有聯句七篇、陶靖節集、有聯句一篇、杜工部集、有聯句一篇、則諸公已先爲之。至退之亦是沿襲其舊、若言聯句自退之斬新開闢、則非也。」（『詩人玉屑』卷十五・韓文公聯句の條）を負的價值觀をもった評文と判定するのは無理であろう。ここでは聯句が韓愈に始まるとの説を否定することに力點がかかっているからである。

白居易と韓愈の聯句詩について（埴田）

また類似した指摘が『苕溪漁隱叢話』（後集卷十・韓退之の條）にもあるが、前書ほど詳しくはない。

(8) これと類似した記述は『竹坡詩話』（歷代詩話所收）にも見え、同じく城南聯句詩を引用する。

(9) 白居易文學集團の聯句詩についての言及例は、『百種詩話類編』・陳友琴編『白居易卷』（古典文學研究資料彙編・中華書局・一九六二年）を含めて調査しても、四例しか指摘できない。

(10) 調査は『全漢三國晉南北朝詩』に收載される作品に限定し、詩題に聯句・連句・柏梁體の語を含むもののみ数えた。したがって参照しなかった別集・類書に收める作品の存在を考えるとある程度の増加が見込まれる。四十四首の内、例えば謝道韞の「詠雪聯句」（『世說新語』卷上、言語編・『晉書』卷九十六所收）や北魏の孝文帝「縣瓠方丈竹堂侍臣聯句」（『北史』卷三十五所收）は、内容（主として押韻）的に聯句詩として扱うことは疑問だが、今、便宜上、一首ずつと数えた。また「全梁詩」卷七に收録する庾肩吾の「八關齋夜賦四城門更作四首」は、全體が四編、各編が四首から成り、一首を二人の詩人が四句ずつ作るいわゆる聯句詩であるが、先の基準から採入していない。

(11) 前註(10)を参照のこと。

(12) この作品は八字句、七字句を交互に連ねて全十四句で構成

されており、毎句押韻で各人が二句ずつ詠ったものであるが、二句ごとに換韻していることから、嚴密に言えば柏梁體詩と認定できない。

- (13) 楊勇は『陶淵明集校箋』二百五十三頁で「惜之」「循之」について「惜之、循之諸書不見、不知何許人也」と説く。また清の陶澍も何孟春註を引用して「惜之、循之、集内不再見、莫知其姓。考晉宋書及南史、亦無此人。意必晉書潛本傳所謂其鄉親張野及周旋人、羊松齡、裴遵等輩中人也」と述べ、いずれも兩人の素姓を詳らかにしない。

- (14) この詩の成立年次を『李白集校注』(上海古籍出版社・一九八〇)巻二十五は、詹鐸の説を引いて「今人詹鐸云、王譜於天寶元年下附考云、是年析涇懸、南陵、秋浦三縣置青陽縣、白有改九子山爲九華山與高霽韋權輿聯句詩、又有望九華山贈青陽韋仲堪詩、皆是時以後所作。按序中有開簷岸曠、坐眺松雪之語、當是嚴多所作」と述べる。

- (15) 『杜詩詳註』(巻二十一)所收。鶴注は大曆三年の作と説く。
(16) 比較的多数の聯句詩を作っている顔真卿に關しては、その没年が徳宗の興元一年(七八四)であることから、中唐詩人として處理した。

- (17) 『全唐詩』に收載する聯句作品一四三首の内には、制作者ごとに韻字を異にするものもあって、嚴密に言えば個々の絶

句を點綴したとの感が強い作品も少なくない。例えば段成式の「遊長安諸寺聯句」(老松青桐聯、十字絶句・蛤像聯、十字絶句)、「奇松聯、十字絶句」、「聞中好」(『全唐詩』卷七百九十二)がそれである。しかしここでは調査の便宜から等しく聯句として處理した。

- (18) 以下の五首を指す。○太宗「兩儀殿賦柏梁體」(『全唐詩』卷一)○高宗「咸亨殿近臣諸親柏梁體」(同、卷二)○中宗「十月誕辰内殿宴羣臣效柏梁體聯句」(同、卷二)○中宗「景龍四年正月五日移仗蓬萊宮御大明殿會吐蕃騎馬之戲因重爲柏梁體聯句」(同、卷二)○段成式「諸畫聯句柏梁體」(同、卷七百九十二)。これらはそのほとんどが皇帝主催の宴席で作られたもので、政治権力と直結した場での公的性格を第一義とする作品群であって、世の太平、天子の恩愛・長壽を主要な題材としている。その點で六朝時代の柏梁體詩と少しの變化も認められない。唐詩の抒情化に反比例してか、柏梁體詩の實作詩數は五首と非常に少ない。

- (19) ここに言う變形柏梁體詩とは、註(18)で示したいわゆる柏梁體詩と違って公的性格が弱く句間相互の詩想・情調が緊密に連關している七言毎句押韻の作品と規定する。變形柏梁體詩としては例えば顔真卿の「七言大言聯句」「七言小言聯句」「七言樂語聯句」「七言囑語聯句」「七言滑語聯句」「七言醉語聯句」(以上『全唐詩』卷七百八十八)や清畫の「遠意聯句」

「暗思聯句」「樂意聯句」「恨意聯句」(同、卷七百九十四)などの十首が指摘できる。これらを六朝以来の純粹な柏梁體詩と考えるのは無理であろう。

- (20) 清畫「與邢端公李臺題庭石聯句」(『全唐詩』卷七百九十四)は二句のみ傳承され他の句は失われているが、ここでは一韻到底として數えた。

- (21) 一つの聯句作品を複数の詩人が變、則的に詠うという現象は五言體以外には一例も見られない。句式は以下示す十二種の類型に歸納できる。①最初と最後が一句交替で中間が二句交替②二・四・八句交替③二・四・六句交替④二・十八・十六・二十二句交替⑤二・八・十・四句交替⑥四・六・十・十二句交替⑦二・八句交替⑧二・十・十二句交替⑨二・十・八・十六・十八句交替⑩六句交替⑪四・八句交替⑫四・二句交替。

- (22) 例えば白居易の聯句詩十四首の内、六首は六十句で構成されているし、韓愈に至っては、全十四首中、八首までが六十句以上の長篇聯句詩である。

- (23) 白居易らの集團は裴度・行式・張籍・劉禹錫・李紳・李絳・庾承宣・楊嗣復・王起のメンバー構成をとるが、韓愈になるとさらに少なくなつて孟郊・張籍・張徹・李翱・李正封といった状態になる。これに比べて顔貞卿は四十四人、清畫は三十人というようにこのグループの参加詩人数は極めて多

白居易と韓愈の聯句詩について(埋田)

い。また張籍が韓白兩グループに屬していることや、白居易らの聯句詩集團に元稹が参加していないことが注意されよう。

- (24) 白居易らの聯句詩のうち七言八句で二句ごとに詠うものは「杏園聯句」(『全唐詩』卷七百九十)一首のみである。

- (25) 前掲註(21)を参照。

- (26) 韓愈以後、こうした方向を多少なりとも繼承していると考えられるのは皮日休「獨在開元寺避暑頗懷魯望因飛筆聯句」(『四・八句交替』(『全唐詩』卷七百九十三)、陸龜蒙「報恩寺南池聯句」(一・二・一句交替)(同、卷七百九十三)、清畫「建安寺西院喜王郎中遷恩命初至聯句」(四・二句交替)(同、卷七百九十四)「春日會韓武康章後亭聯句」(四・二句交替)(同、卷七百九十四)の四首しかない。しかもその句式は韓愈・孟郊に比べて複雑なものとは言えない。

- (27) 第四節で示した分類のうち⑥にこうした作品が多い。例えば嚴維らの「一字至九字詩」(『全唐詩』卷七百八十九)はその典型と言える。また註(19)所掲の顔貞卿、七言變形柏梁體詩にも戲笑性が認められることを指摘しておきたい。いずれにしても内容的に滑稽味のある作例は、通常の句式に據らないものが多い。

- (28) 白居易における詩の競作練磨は、元稹・劉禹錫との和韻詩の分野においてなされたと言えよう。